

あて、その中心産業である製紙業を主に見て来た。全国的な不況にみまわれている製紙業とはいえず、富士市においてはまだまだ衰えてはいない。各企業が独自の開発を進め、生産の向上を目指して努力している姿勢は、私達にも大変丁寧かつ熱

心に説明してくれたことでもわかったような気がする。ジュースやおしぼり、帰りにはお土産までいただいた。

(7月19日～21日 内藤教官指導)

## 山 梨 巡 検

神 山 直 子

「勝沼におけるブドウ栽培」を中心テーマにして、三上教官指導の宿泊巡検が行われた。10月3日のことである。初めての宿泊巡検ということでみんな緊張して高尾から電車に乗った。

中央本線の笹子トンネルをぬけると、勝沼付近の山麓から平坦部へかけて一面にブドウ園のすばらしい景観がひらけた。さすがにブドウ王国だと感嘆した。

まず、山梨市にある果樹試験場に行ってブドウ栽培のお話をうかがった。果樹栽培には気象条件が大切であるということ、山梨県がその中のブドウ栽培の条件を特に満たしているということ、ブドウの品種のことなどである。興味を持ったのは、現在ブドウの木が多くがウィルス病にかかっており、それを駆除するのが当面の課題で、試験場が中心になって取り組んでいるという点だ。

万力公園で昼食をとったあとの加納岩農協へ行った。この農協はモモが取扱量の85—90%を占めているため、モモ栽培について話をうかがった。先の果樹試験場が科学的な立場から果樹栽培を見つめているのに対し、農協は農家側に立って考えている。たとえば、栽培品種、木の植え換え時期や栽培法などの指導は個々の農家の事情に合わせて行われる。出荷が共撰方式のため当然といえば当然だが、日頃農協とは無縁の生活を送っている私達には驚きだった。

そのあとサントネージュワイン工場を見学し、ワインの醸造工程を自分の目で見た。しかし、こ

こでの私たちの楽しみが見学後のワイン試飲だったことはいうまでもない。気分がよくなったところで、勝沼にある宿泊所「ブドウの丘センター」へ向かった。

2日目は勝沼農協へ行ってブドウ栽培のお話をうかがった。ここでも、農協が農家に援助している仕事の内容について聞いたが、特に興味深かったのはブドウ栽培農家が現在直面している問題である。最近では山梨以外の県でもブドウを栽培しているため、市場では供給過剰の傾向にある。そのうえ、農家1戸あたりの栽培面積が約55アールと経営規模が小さく、収入が伸び悩んでいる。そのため、他地域に比してまだ割合が少ないとはいえ、兼業化が進んでいる。そうすると今度は農家に働き手が少なくなり、ブドウ栽培がおろそかになり、生活は依然として苦しい。このように農家は一種のジレンマにかかっているようだ。また、交通機関が発達したことを利用して観光ブドウ園に切り換えたところもある。この場合、継続的に客が来るように一定価格で品種のよいものを売りさばくということが課題になっている。

そのあと観光ブドウ農家に行ってお話をうかがった。農協での話と同じ内容だったが特記したいのは、後継者育成がウィルス除去と並んだ大きな問題である点である。ブドウ狩りを楽しんだあと農家の人の苦勞に感謝し、これからのブドウ栽培の厳しい状況を考えながら帰途についたのだった。

(10月3日～4日 三上教官指導)